

令和 7 年度外務大臣表彰授与式

10月2日、令和7年度外務大臣表彰授与式が大使公邸にて行われました。外務大臣表彰は、多くの方々が国際関係の様々な分野で活躍し、我が国と諸外国との友好親善関係の増進に多大な貢献をしている中で、特に顕著な功績のあった個人および団体について、その功績を称えとともに、その活動に対する一層の理解と支持を国民各層にお願いすることを目的としています。



令和7年度の受賞者7名とその功績は以下のとおりです。

1 ルペルフィーナ・エロイサ・デル・カルメン・ロハス・エスコバル ラ・セレナ大学学長

1989年に長岡技術科学大学に留学し、チリ帰国後にラ・セレナ市の日本庭園「こころの庭」建設時に通訳として活躍、1995年からはラ・セレナ大学にて教鞭を執り、長年に亘り両国の学術・文化交流に努めてきた。前学長と協力して日本語コースの開講、毎年の日本文化紹介事業「日智友好週間」を主導し、同事業は学内だけでなく市民も参加できる大規模なイベントへと発展した。2022年に同大学長に就任後は、日本の国



際科学技術協力プログラムを通じ北海道大学等と水産廃棄物中のバイオ素材の有効活用等に関する開発協力を実現し、両国の学術交流を促進するほか、日本文化専用棟「なごやか」の建設に尽力する等、日本文化普及に貢献している。

2 ホルヘ・アンドレス・ゴンサレス・グラニッチ プロビデンス文化財団理事長

2018年にプロビデンス文化財団の理事長に就任以降、同財団の施設・劇場において日本文化展示会や公演を多数開催するほか、当館や国際交流基金等と協力して文化関連事業を主導してきた。現在開催中の「超絶技巧の日本」の展示会を始め、無料での事業開催及び大々的な広報により、多数の市民に日本文化に接触する機会を提供し、サンティアゴにおける日本文化の普及および推進に多大に貢献している。



3 常川 糸江 医師

1983年から40年以上に亘り、サンチャゴ日本人学校のボランティア校医として、日本人学校の児童・生徒の健康管理に携わり、子どもたちの健康維持に尽力してきた。また、必要に応じて日本人学校の教師の健康診断を行うほか、病院への付添いや診療の調整など、細やかなサポートで尽力してきた。さらに英語及びスペイン語が話せず、医療的ケアが必要な在留邦人やその家族に対しては、休日や夜間を問わず親身に相談に応じ、病院への付添いや医療機関との連絡調整等を行う等、在留邦人への医療支援にも貢献している。



4 ルイス・アルフォンソ・ディアス・ブロートン 元モンブチレ会長

1995年に国費留学生として日本大学及び上智大学に留学し、チリに帰国後、通訳・翻訳者として活躍する傍ら、2006年に元国費留学生と共にチリ帰国留学

生会「モンブチレ」を創設。2008年には会長に就任し、2025年までの17年間に亘り会長を務め、帰国留学生のネットワーク強化や、国費留学生制度の普及、帰国留学生間の交流や留学生の選考に長年尽力してきた。また、チリの大学において、日本文化等について教鞭を執り、講演、書籍や論文を発表するなど、日チリ両国の交流の架け橋として相互理解と友好親善の促進に貢献している。



5 峰村 芳春 折り紙講師

日本の仕事を定年退職した後に、以前勤務して大好きであったチリに移住し、2010年にサンティアゴの日本総合学習センターの文化講師に就任した。以降、折り紙講師として折り紙の普及に尽力し、同センターにおける折り紙講座のほか、大学・自治体・文化機関等との共催による折り紙講習やワークショップを多数開催、要請に応じてテレビ番組やアニメ・エキスポでも折り紙を紹介し、その参加者は15年間で延べ1500人に上る。幅広い社会階層を対象に広く開かれたワークショップを継続的に行い、誰でも楽しめる折り紙の普及に努めるなど、日本文化普及と相互理解の促進に貢献している。



6 アロルド・グスタボ・パラ・エスピノサ 柔道指導者

1975年から柔道を学び、以降、50年にわたりチリにおいて柔道指導者として日本の武道の精神を多くのチリ人に伝達してきた。民間企業や大学で多数の柔道クラブを設立し、複数のクラブでの指導を掛け持ちしてきたが、決して指導料を取らず、全ての希望者に無償で柔道を指導し続けている。また、自閉症や視覚障がいがある子ども、大人たちと柔道を学ぶ「包摂的な柔道」を推



進し、技術向上と心身の鍛練に加え、日本の武道精神を伝えることで、柔道の普及とともに両国の相互理解の促進に貢献している。

7 可児 清隆 チンキウエ公社貝類種苗生産及び増養殖専門家
今後、授与式を実施予定。